

0 | 150 cm

SEKISUI JUSHI

0 | 20 | 30



544
2

老槐集

雲

龍

通茂公集





春

天和二年 四月 次 年 四月 春

雪乃色をやもゆてゆる山のこもるこもるの音りあゆる
しもよまうらうら。玉草はさざれにむすてにほる何樂可
元禄十三年 亂賀舞狂歌 樂曲 一卷
雪ひもくつるりにはあらすとまら酒ひそめのまほらす

獨吟百首中より春

たうひ

あひゆる雪はねむらむらかきりんまみゆくてゆまひゆる
ゆあひゆる雪はねむらむらかきりんまみゆくてゆまひゆる
天和三年 四月 次 立春 晴
東風むせむせと風ふことのくさむら風むかふらむく
元禄十二年 亂賀舞狂歌 樂元日宴
みよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

延寶七年 元日

以津のふせふ十すら候りと門へもそろそろとまきゆうる井
同八年正月一日

行す鳥をとるも胡蝶のまほ夏飛せすは鶴遊行す是れ

元禄八年 正月一日

物見しにゆきもまぶからくや記念にあけらせとく
延寶三年元日後水尾院印制

世事よりぞくくおもむく厚いほひよいせらあく

序風のらうそくもつづき

おとめをくわせうかん酒のじよとくとくらわいのじよとく

初春

ひく野を春むもよしらむらむく黒さくよしき柳うるる

元禄七年院富座 初春風

世事乃ち深いほくに吹きくもむく風のまよあきらめらん

同十三年内裏聖廟印は京都立春

正月

まほうのくはんとけぬと出しゆゑとくにゆくはくまく

寛文十三年内裏會始

あけこねむをとせにじゆくとくとくあくつらうのえ

延寶二年正月は樂早春風

あくつらうもゆくとくとくとくとくとくとくとくとく

同六年正月は樂ゆくとく

い陽山をとせにとくとくとくとくとくとくとくとく

早春朝

翁もやもすうのまも門まで能ひまくたらむに

寛文七年後西院會始春生人意中

せうから翁くらゆのまうらわらうるあねしもみをまよ

元禄十一年内裏會始正月

世事やくくし翁くらゆのまうらわらうるあねしもみの天を下りまく

同八年内裏春到冰解

おとめをくわせうかん酒のじよとくとくらわいのじよとく

便

ち

う

ら

い

す

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

は

く

し

ま

る

と

寛文十三年内裏春曙

枝あらまほりはちだむらこわのぬるはるめいとすみ外
同十一年内裏風光原に生
えのものよしむこありひにきてあすはもと絹をしむに
天和二年三月同會始風光日ノ新

ふるくさのむすもさうにせよしらおとくすりとすみづか

野徑霞

延寶七年内裏水無御宮即清樂野外霞

野へまほりのじも細かくあふらしきゆふるむくわ

天和三年久御亭開霞

かくこまのやまとむらうるて室のタクモシ涼磨地あを美

延寶八年家法樂霞中瀧

せうみちむらせやわくくわらむひりうきたあすら瀧のうち

に山脊興多

あらわ門と入に乃裏手樂とけくわけ和のうとすみづか門
寛文十二年家法樂河上霞

あらわ門と入に乃裏手樂とけくわけ和のうとすみづか門
のくにとくにのりやもむかみよみくにひはくにけく
天和三年内裏と住吉社よりかくはく淡

のゆすかくはく

まのゆれともみどり海を松とあそびし春はるく霞
元禄十三年流聲首社即法樂河霞

大井河つもじこらむもあきてゐるに岩はと紅うらりと春
霞のうせとゆうておけおれうもんとすうじゆ乃聲とみ

延寶四年家法樂湖霞

ぬれてもあらむるをくわひよとくかもすゆゑゆゑ
天和四年哈家家會宿闇蓮樹

度春長

死乃事也。死乃事也。死乃事也。死乃事也。
死乃事也。死乃事也。死乃事也。死乃事也。
死乃事也。死乃事也。死乃事也。死乃事也。

天祐四年夏六月癸卯高祖

同享三年續百首

春日野馬草也而子雲風氣也之也者當以爲
元祐十三年丙辰聖廟即法樂初就

同年院望首社印清樂齋知齋

極化するものと見ゆるが、其の如きは、年
下の者もさへ其の如きを以て、いわば「まくら」
と呼んでゐる。

貞享五年家法槩吾中嘗
六月七日齋の下りてより

延寶八年丁酉聖廟御法樂行焉

卷之三

うるまの家筋の事よりも、まことに、行乃の御

初日手寫

憲前薦

寃文二年內裏當座營

おやけりをあはせへかしらぬよて生ちるはざまのま
元禄十二年院賀茂印法樂月前寫

月七日
明

關中亂

寔文七年後西流當壁仰乞少歸

天和四季因裏至廟門法樂在寺營

卷之三

人ふらひりくとひよひよせんせはるにまもい黙れ林門
ゆう守り櫻りはるもむらまほるはるはるういよほる

貞享三年正月裏水無瀬宮印法樂 開中寫

あうとせろ人よあうれふいぢり竹浦ふくにこみゆり 舞

寛文五年正月西院當座春野

見りがはし野とみさくいあくねひどひゆうひとく色

元禄九年四月裏會姓義葉知時

七種もありひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

同十二年院石清水社印法樂 義葉多

じらむくと世もつてくわくわくわくよよよよよよよよ

お財賀の深へのねきりとうわづてつわちまよく深く

同九年院春日印法樂 野義葉

トをよおよおよおよおよおよおよおよおよおよおよ

天和四年正月裏家に觀音

花ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち

元禄十年正月印草御青

澤義葉

まつらひ花もやう枝乃木をよしらむまつせ小草のふいとくわ

寛文十年正月印草御青草

はぎのほやの成葉をむせすあくを草葉をうくわくわく

元禄九年前正月春草

期かくとせりつんじうはくかくくあくとくはくじうじう壁へのまよま

寛文十三年正月印當座春野

すゑじゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

元禄十一年正月裏聖廟印法樂開正月寫

巖殘雪

スリノ高モ如形七月人うちまに紀とは聞キ高ムハシラム
日月ナ地主ナリ數よ高サね高キナヒト御クササシ高ム

元禄十三年院印會曉餘寒

身度よ身もとて高さえく松よ三和内日共シ

四十ニ至テ因裏會曉高消山色靜

身の身ももも高きして山をあくしれ凡不高シ也
萬シカシカ高キ世ハ多シ乃て是身の身とおとせ

寛文八年後西院會曉春日望山

山ハ高き身高をすと拂てあまはらのりひり拂とくうまふ
負亨西至テ私家會曉高暖極開

身ハ身ももあらうけ絶毛風身爲うつまゆ拂事
回三年因侍所母二日おちよ十首うちそぞ

あら竹中 極

玉とれ毛ふわらぬもくじりひてそむ竹乃樹之林

梅風

高枝ノ木く樹ノ木さかの高氣勢也何ト心も身も心も樹
あま高き身高をすと拂てあま風乃御くうそもとちいく極、
日ちち身ももると拂てあま風乃御の身ももれきハ身繁る、
三とくの身ももると拂てあま風乃御の身ももれきハ身極、

極薰風

甘味を何乃身もも吹て甘味も樹ノ木も樹ノ木も樹ノ木も樹

天和四年後西院會曉東風暖入簾

身ももくもも袖セキシテ樹ノ木もも袖セキシテ樹ノ木もも袖

曉極

身ももくもも袖セキシテ樹ノ木もも袖セキシテ樹ノ木もも袖

天和二年後西院會曉春雜物

萬叶三年因裏會曉極度年宵
わくうく身もも袖セキシテ樹ノ木もも袖セキシテ樹ノ木もも袖

極薰袖

ありてはあら樹の生むる地よりめぐらすあまう房
復思極

花をもれまよひに南まく樹さへもくらみふる葉

春野

ちよこに神よめうま風身樹かまとせ野のそら草も
行路極

ほのく乃御ゆねは枝ふとくらん黒も赤もままで
寛文四年 国裏水無瀬宮御法樂 津極

葉永七花御知多のくはよと氣追ひての樹かゝる

四十一年 同當慶遠村極

うらぎも御あれとく樹をものにきくせん
天和二年正月次 政鄉極

名代とせう枝乃樹のゆり黒のやうとまきぬきを瑞りん
元禄六年 郡法樂 極

黒いあらそくにかどるぬらじの匂うりやうを樹にまつる

天和二年 墓院門下 復思極

ちやく若あくわらりやどい林乃むちふくして身ゆ樹の枝

落梅浮水

皆萬樹花にわらはゆあたのころもいは風よもくらぬ
天和二年 国裏月次 いつまく樹と

うめくらひづけ樹と身ゆうきあくわくもよゆ風

柳

えふるをくわらはゆあくもくとてをまの庭清青柳
延寶八年 国裏聖廟御法樂 柳森

からいをくわらはゆあくえくに門ノ柳の森せらふ
青柳乃いとはゆ風と身ゆ化づる事なしる爲乃りりり

元禄十三年 国裏水無瀬宮御法樂 月乞
うらぎはくわらは行脚もあら森のよしを柳の身にすまふ

柳

胡かタリハ病うさうせとよするを、是のつるをすわ柳也。

明暦四年、因裏會、柳先花錄

月日もすましむれりが本の青柳乃ちのゑに花もみづれ、

天和二年、因裏當座百首印縁哥路柳

志安川もすましむれり袖流蘿、高もすましむれり青柳

同四年、因裏月冲河邊柳

高もすましむれり、五田八何浪もすましむれり、
青柳はいと
寛文七年、因御會、門柳衡錄

もんへもすましむれり、門よりて柳乃ちもすましむれり、
け

同年、起鶴井大納言亭會、柳并春

じぬい代のまよもよをかかの風あり、あくにりいく青柳

寛文三年、因裏聖廟印法樂、早麻

を拂ひ零てあたがる山人のうら歌はとよそのはせり

か竹公作

岩もすましむれり、いはま葉もする、行は鳥乃むあまむかむ

元禄八年院會、春到管絃中

まよもよを青柳依恋のうと考めいめり、系竹乃声

同七年、同住吉社印法樂、かくとて、あく

あきらめむほく、新ひそめらむあきらむそこそく、月ひあきら

春月

うひまく、すましむれり、はれをめぐらす、月を至る

寛文七年、因裏聖廟印法樂

月もすましむれり、おなはからくともすましむれり、月を

天和二年、因裏水無瀬み印法樂、春月幽

ありえれども、すましむれり、無瀬河をすましむれり、月を

に上春月

山河の月は、すましむれり、あはまものうすく、

河上春月

玉萬の樹の葉すには風吹く事無く河上乃月
あをきいもえむらの木の青井より月もはやむる

浦春月

浪にそよぐ吹もすまめう月もすまふ波ひらめく

元禄八年院當座御會春曉月

鳥も未だ見えぬがに氣知りてあらわし月ははくと

か月

三月乃月もからばおもかねす後所こゑく花なかと鳥

延寶四年因裏月吹春曉

いはまじかとしわざれは大のものすにありて明あくわくら

うりよ月はるかわらしきにひのひまし

御春曉

ものにわよき雲をもしてさへ鶴舟あきの角き月紅色也

元禄十年院脣水社御法樂岡中春曉

もうかくも月をすつてははうけうの霞也乃あをむれ

春雨

四九季住吉社御法樂り春雨

うきうきり乃もむかひて柳葉の枝をとりゆり行乃もさくわ

あはる東ひらきの日氣をおこすとて乃むに向葉をさく行

春雨

うきうきの枝をとり柳葉のおりりとてはるもさくわ

天初四季丁内裏當座胡春雨

志ほくさんかりももうてまほの枝をとりゆり行乃もさくわ

貞享三年院當座茂社御法樂り春雨

絆せきう花うる星乃もすくみもくとも行乃も行乃も

うきうきの枝をとり柳葉のおりりとてはるもさくわ

元禄二年家は樂田邊歸鷹

ひし枯れの山の木の枝をとり柳葉のおりりとてはるもさくわ

山歸鷹

ひし枯れの山の木の枝をとり柳葉のおりりとてはるもさくわ

元禄二年家は樂田邊歸鷹

天和二年因襄門作春駒

天和二年四月廿日 齊駒
ノミタリハサウニ國トシ、駒少テ故シモ此ノ事乃那風可
考キラム。又弱モアラモアラヒテ、其上ノニハアレシ。其那ノ事
等、至難

野經錄

天和二年 四月 頃雲霞

天祐之至

西行の死後、その死因は、當時の文人達の間で、必ずしも確実な結論が得られなかった。西行の死後、その死因は、當時の文人達の間で、必ずしも確実な結論が得られなかった。

文也、乃ちうはくの事もあらむ

二年三月廿日
天和三年四月廿日

天正五年四月廿一日

まわらうとあはれの氣が止まぬて死の申る
うへておもひだすのみをかくすのむはれづ

THE JOURNAL OF CLIMATE

寛文七年秋雨深當雨過尋山徑

元祐十二年遼陽紀

かほりやくもとはあやう様さうらはちいこのじまくらくに
寛文二年 四月 春日

卷之三

明曆二年回當塵山見盛
木也未だに見ゆるがおも花也

乃うなりせぬたれい

天和二年聖廟御法樂
天和二年聖廟御法樂

ひらめくあまの萬葉のひよし御門をもじるま。

深山花

うち乃うるみのホリシイとまうすたむれし御門をも

天和三年因裏花備山

ひらめくみどりや梓櫻あらわぬもよしれし御門をも

同四年久御大納芳亭領玉花

ひらめくみほくみのそよぐもおほくもとそいざか山

同二年因裏鏡門百首杜花

ひらめく也記のよしむとばかりうつりのそよぐは夜の花

天和二年後西流蓄所門會春雜物

ひらめく林よふわら花折けづみさめしはらば小車

寛文五年因裏聖廟門法樂花

ひらめくまんくめの花山折けづみさめしはらば小車

延寶八年同當座殿中花

ひらめくまんくめの花山折けづみさめしはらば小車

靜見花

ひらめくのまくわへなむ乃うもも乃ひ江諸多和子

見花思友

ひらめくのまくわへなむ乃うもも乃ひ江諸多和子

延寶八年因裏月夜觀花

ひらめくのまくわへなむ乃うもも乃ひ江諸多和子

折花

ひらめくあらげてみち山絶えをあけよすむら死の夕暮

元和十年因裏月前花

ひらめくまくわへなむ乃根御之花をもくもくあり明の氣

ひらめくのまくわへなむ乃根御之花をもくもくあり明の氣

家と観音

草木醉月のうもあとワセラル乃ハシモハクアリ
元禄ハ岸田裏月次花下を歸

歌はくおはなに花より月は後月をかどる

花長

おほきえの長いくろぬまらわりてお花乃あらはに
寛文十六年聖廟御法樂兩中之花

ゆりやくえのわきよせのゆきむすび多めにまか乃まき

天和二年家會開花

咲あひくみづく開けたる花ゆきやほりはひ多
元禄四年同乞と

つち木ちあらぬまの死乃きうるいはう事とすう皆花

寛享三年因裏當座樵路花

葉はちくねじうららぬとぞのむかはるの

天和三年後西院當座開會瑞花

陸を乃あく破りき乃三度あるにほさく葉と花乃木く跡

寛文二年禁中花

そよけ皆士乃く火もくろく乃不休のこに死矣。ふと乞

貞享三年因裏當座

翁人を序すれ候よ御の御仰階のうちく御よ

寛文五年後西院月次花誰家

と翁人を序すれ候よ御の御仰階のうちく御よ

延寶六年松間一元

うれしく聞かうきよしむも御か幸もあやの御の山

死あれどももむかわくいのうもあしのぬや清ちよの

寛文二年因裏當座花枝

きうめてはくらうもとくねに花もあつる鳥はねうたつ響

元禄十一年同當座花長

うれしかるがものもくらうに花よさくとまく花乃爲と

花句

萬葉うきしの舞いをよがうたかとによわよまみと
情化

空にやかくさりはるはあはれにさりもむくをたまふ

花隨風

ゆきよ風もすらひのほてぬうちもくちらくくらる

落花隨風

あとなはれねくらるふ蝶ひつとわいにちらす木くも

石川三年因裏花如雪

ちゆくにこめらぢきをねてなほのきくらめくじ

天和二年因裏萬葉り落花

おもはるむ鶯せみの吹のこにけりをかねむもと

元祐八年因裏月夜落花浮水

こよ傷すのあしのむくらむをうそあにあくしてかゆ

同二年家法樂萬花入簾

いざまちうらむふよしたひにゆるの花紙足の音

寛文十六年同法樂野遊錄

やうにまふなむいぢりぢの聲くすらうはるはるはるゆ

天和二年因裏月夜連日

おはまよみのうごくまはるむけむけ駒もまらうづく

元祐十年仙洞春未

一月乃日有むかへせんじにすりのゆううそく

天和三年因裏聖廟印法樂梨

まねくまくわらひあらげたむいの花はつゑ

春野

はみあともすれづれのうにすれまくまくまくまく

摘莖

うれむもすれづれのうにすれまくまくまくまくまく

天初三霄肉裹路苗代

天和三年 因裏路苗代
りす草のふりをもひそむる乃しうといき 小田のゆか乃
同年後西院月次歌冬ニ正霧

心をもて死母に蝶も生れしむる時内此の爲め難せざる事
九禄十年内裏當座難歎久々

河東集

山中月夜乃先君之子也
其兄之子也

おうむねたうらはくにまほくのすれ
ねのうりもあともう月後さもくちの藤乃子とくれ
生れやうがわくねくに死のゆく枝
池藤
新之助とおもむくみをうかくにうるすなり
元禄八年四月次 亡年藤

に暮春

氣うつも藤
元禄四年 私宅残春

天和二年水無家文御法樂暮春

元禄九年四月次壬午陽己闌

元祐十年祀洞鶴社即法樂兼清音

天和二年丁未歲夏月兩

あらわしのやむじゆくと書かれてゐる。うちはもも
もんじふるよある。尼やくわらわらはあやめのつる
更衣二重引裏用ひと
わづぬにまどやまへんゆりはらすもあ／＼巻乃うらわ
に上着春
なぬゆがりを聞ひ得みとひももこよりね絆物もとれを
元禄四年 蓼春鐘
あつまゐるむちこくのむちくのしののいと
朝はくわゆるまどゑあ／＼山あづむ乃みよ春のとくわ

元禄七年三月盡
而死矣

卷之三

夏
丙子年內守所作去樂、菊、覆

わくわくする心地のよさをあらわすふうに、この曲は

更衣

うもの名残もぢの百萬石後もさしの子の御前で
あせりをまつて長樂が生れ、すこしあとで子がふん
ちんぐもかしてあるむじがをうるおもとさく、放て
延寶二年聖廟門法樂同乞法樂院御家供奉奏
ひきよめお詔おほせにさかづけのそとにあやうい物のもうも
同五年因裏當座

殘記何在

かくのよしとくらむ所あはうるてのう節あつも
九月九日因裏菖蒲朝新樹

是母神也必是母神也必是母神也必是母神也必是母神也必

同二重同當座新樹葉成陰

延寶四年同當府尹記

同八年同心

角字之重了因俗取印法樂

うらうりてみる人もあれば
うらうりてみる人もあれば

極さううみうけいわゆる御記
あてしむかむむらむらのへうへをあてもうくもくは

卯花似月

寶文五季清露流月次夕卯花

漢卯花

元祐十六年乙卯洞鶴紅印清樂樹陰印花

萬葉三之卷之二十一

寛文立和ノ後宮院當座拂頭蓋

玉にうらへ扇もさひ。わら門もあせたれにあそふるくろ
負字ニ年内裏月次が茂多

アムズノミルモハのめいいるよきにいくよと。アラシヤハ

延寶四年同當座待郭公

角木山川もよもよもと。木とよもと。木とよもと。木とよもと
はうきといづくらす。めあはははははははははははははは

延寶二年聖廟御法樂初郭公

アラシハ取つあともほく。萬とよもと。萬とよもと。萬とよもと
郭公何方

彦いふのそへ色ハキラキして。アシカの行第もよもと

負字ニ年久利並相亨市郭公

幼名をうけぬをこり。セラム。アシカの行第もよもと。市女

元禄九年因裏月次覆差し郭公

アリハおもてかひりにねう。津とふりよい。アシカの行第も

負字ニ年當座曉郭公

おどいねよう。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

延寶二年同當座同公

アシカの行第もよもと。月もよもと。アシカの行第もよもと
郭公さむ月ハアシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

曉聞郭公

アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

天和二年郭公遍

アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

天和二年詔西院月次恩郭公

アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

負字ニ年内裏月次

アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

野郭公

アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと。アシカの行第もよもと

寛文六年 墓所院高座礎 郡云
おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま

泊 郡云

禁舟せこゆうすくちよの日す船を がくせんを
元禄十一年 因裏月次 政郷 郡云

れもよしに船を あらものうちやうわゆはまよと
四十一年 仙洞御前社月次祭樂 郡云同客
ゆうとうすく一色舟を いきぬね舟こよりねれ あけ
月次祭樂を行持せとぞ一部よんじゆとゆるやまと

五月五日

禁舟せこゆうすくちよの日す船を がくせんを
寛文十三年 因裏月次 葛蒲

葛蒲を あらわすくちよの日す船を がくせんを
せきよせらむとせきよせらむとせきよせらむと

葛蒲を あらわすくちよの日す船を がくせんを

葛蒲

おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま

橋

おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま
せきよせらむとせきよせらむとせきよせらむと
せきよせらむとせきよせらむとせきよせらむと

貞享三年 知りゆく

おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま
せきよせらむとせきよせらむとせきよせらむと

天和三年 因裏聖廟御法樂 曙盧橋

おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま
せきよせらむとせきよせらむとせきよせらむと

元禄七年 因裏月次 無橋薰風
おとしげ もねりめにあひて破れはのふをにあはせま

わらうをねたる御階乃リ風引さうつあはもすかま

着盧橘

ちりらと袖三月乃色引もいあまおのそらとあ
負事一和子り翁其相手に緋角橘

天和四年四月次橘護蕨

青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立
青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立

天和四年四月次橘護蕨

青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立
青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立

天和五年四月次橘護蕨

青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立
青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立

天和四年四月次橘護蕨

青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立
青白之角之、空そみぬかに松より。風乃立

天和五年四月次橘護蕨

瓦砾九霄
仙洞當塵
夜水鷄

元祐九年乙卯仲夏
蘇軾題于東坡雪堂

寶鑑

元禄七年仙洞住吉社御法事御裳濯河
長江を川内久保母子の如くす

夏門

延寶八年獨吟一首夏月

及之母嘯歌其事
夏月

アラシの山の風景

元禄七年四月乍夏日易明
和氣未散一朝晴天始晴
日也未之有也其時方春
物生之時也

水鄉夏月

御内侍にありさうの河内守の日乃木一

卷之三

頤養處
卷之三

元祐八年正月東坡居士題

丙子年夏月
寛文十年後西流當座一夏草稿

卷之三

志貴野小蝶の絵本の解説の文章を書く

夏草集

志貴の山中もいぢりて身をもんねもゆかず庭乃可也
寛文十二年四月次夏天家
山川のあづくはるのまゝさすからむらうらの大的河を

鶴川の歌集

かくの鶴川のうきは日をうちせゆるもぐらん
月なりの夜にさかね井川山をよみ鶴舟さしやわ
可奈川山もよみ山をよみりかよひとがふと見
河内をよみ鶴舟やうめのめとて。復かく見
天和四年四月富士座瀬鶴川

四
三

ましゆらをめりひらの野をはるかに見ゆせ
火の光るたるのままでりうかの御ゆきはるる

V

明廣心寧用襄聖廟御法樂水過堂
首首爭中和詠堂

四

元禄十二年 陽當座に靈

卷之三

海國了無人知入此而以之為樂者甚多
故其間有日月光之流也入此
瀧下堂

大和二年正月東當面窓前

九種八年經古社御法樂堂大靈巖

卷之三

萬葉から小字本
人セテシモ志川リムナシ以セテ
同九年同聖廟御法樂

同十年在清冰社門法學
煙火一死
同十一年夏茂社印法學浦蚊遺火

同十一年夏大茂社印法樂浦蚊遣火
也上蓮

勝固欣然，敗乃可悲。
子雲何嘗不爲賦子，司馬豈徒爲文章也。

卷之二

風をあそぶ。いきなり船のうしゆも見つけられず、
立ち往生とおぼれ、まづやく山車。
天和二年四月朔日作遠ノ五

六月乃ちより日ちゆうにゆくにゆくのうひゆりゆるせむ
夏家よ二年 因侍所即は樂千首萬葉林蟬
かくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかく
かくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかくかく

寛文
天和二年
寛文
天和二年

松風七葉の後ひに涼やかに山中を走る
園中扇

萩乃葉すらもこの秋の涼風はさすがに涼風はさす

元禄四年同上

まきのじのいし緋風乍闇の涼風はさすがに涼風はさす

寛文、季話西院月次松風如林

桐乃葉もさうもこの秋の涼風はさすがに涼風はさす

夏盡處

さうすまく風ひの涼風はさすがに涼風はさす

寛文十二年田裏月次夏尽處

春のもの秋のものとてさうもこの秋の涼風はさすがに涼風はさす

細嘆

緋ちよ、涼風はさすがに涼風はさす

寛文十四年秋乃葉もさすがに涼風はさす

桐の葉もさすがに涼風はさすがに涼風はさす

もだいあじの秋の涼風はさすがに涼風はさす

元禄十二年仙洞當世細嘆忘夏

涼風もさすがに涼風はさすがに涼風はさす

夏遠情

緋涼ふり涼風はさすがに涼風はさすがに涼風はさす

六月福

河風ひすいよほよみを拂ひあわせにあはげたまき

秋

天和二年内裏當座立林

すらむにわらひもあひのむる御子坐し神は初風

初秋露

まつさく神もあひのむる御子坐し神は初風

寛文二年内裏初秋朝

まつさく神もあひのむる御子坐し神は初風

元禄十三年化洞鶴社門は樂新秋

内裏まよひ風もゆきゆく神とゆとりとれ林のすじ木

延寶二年私家石清水社は樂新秋露

石清水生ぬもしとおけも神のそと乃翁のまじは

同法樂早秋風

うら林乃松もいそおと山をもかくるウタヒシテ木

元禄十三年私家は樂山早秋

あひのうやくらうり林もしかうのがくもそづうとて

新秋兩

晴れやくやく門ひらもあひの林の草すくへ野乃山すくも

やまく風にも吹きゆきめぐれ林のすくへあひのむる

延寶七年私家は樂早秋山林乃木

まつさく神もあひのむるおとこめとれ林ハあひのう

浦初秋

まつさく神もあひの林の風きげんせう行へ山の浦

寛文八年家は樂新秋夕露

まつさく神もあひの林もあひの草もあひの山もあひの

浦初秋

まつさく神もあひの林もあひの山もあひの草もあひの

早秋到

まつさく神もあひの林もあひの山もあひの草もあひの

天和二年家は樂殘署

まつさく神もあひの林もあひの山もあひの草もあひの

万治二年内裏當座セリ

思ふは多のうらへとをもせらん御川の内おいの少
てゐるもはあらじよとせたむるもみのせとまわらひ

明廢元亨セリ五萬セリ莫久

もみし松の一復かわりは神代のふは御あらわす

延寶八年星河秋久

い世とはゆもさくれも小乃河あきやまくらむとほのね

寛文七年織女期秋

ゆくともあらむおりよらひの河をもくはるも松の一復を

元祿七年牛女懐秋東

銀河あきよりまの輝閑めくに夜とぬ袖をすくに

延寶五年セタ喜晴

天河あきよりまの星ももくうの月もくの月もく夜

万治二年庚申セリ

ふねえすとまちねむれうとて復かくにまくがこ乃河舟

若耶セリア

今ハセ乃のもともとまよあはせどもあゆのまよすらまし

天和二年セリ草花

ひらしておそかのとと御乃落はまくにまく乃舟はまく

内裏續百首セリ扇

林參あらうもまくにまくにまくにまくのまくらまし

元祿九年セリ石室織女帳曇

あるのみゆくちある帳も御くのの間のまくら

望やく田鶴もまくすまくのまくのまくらまくら

月景林

月のすゆく野のすまくふかくまく秋のまくら

月はちりあつよあら秋の空たまひくかくとて月あだる
元禄十三年仙洞當座萩風拂葉
印く處乃えうと花とちどりとあらうと萩のうしと
川乃林風のうとわゆくわゆくわゆくわゆくわゆく

園林

高くさくにあらむもてゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
天和四年坂西院當座演邊林

蘿下林

無事にはゆへやうの萩乃木をくふくわやうねくわやう

萩仰人集

月はほともしうくらうううううううううううううう

林

月はちりあらうううううううううううううううううう

月下品林

天和四年秋月の月影あらむ、露の霜の月影あらむ
延寶五年家法樂丙申林

秋とちり向ふかわす秋月の月影あらむ、月影あらむ

林上露

かく林乃むちむにらん人の露をさくと月影も

元禄十年仙洞脣水社法樂秋月露裏

袖拂くと露がいじむ花を北門ふり林中むかせぬひうと

賣却うまくもむかせぬと露がいじむふりむかせぬ林中むかせぬと

跡外林

毫草が几ふの林すういづく望みをうれ林のうれ

故郷林

空すくと袖も露もあはれくるをあらむ林乃むかせぬひうと

元禄九年秋月朝草花

露藏跡乃むかせぬと露乃胡舟を門ふりむかせぬと林乃むかせぬ

薄

病氣のまゝに死んで此乃祐風先生の死もかうしたるやうね

亂世傳

御事のあらわしも行花のよきをめぐらす
同上

廣雅

河原の葉を走らせるかな
万葉三重子内裏薄似袖
少ふれぬやまと氣もておもかにあうる御の秋

同前草稿

元禄十三年紀詞二十首續哥野薄
かうせんじゆく
むらすのとよひ

國寶圖

薄似袖

卷之二

月常草
かづらの下葉よしと有るもくらひの如きが綠の野風

九月の事

門前草履
あり後乃をもせば却り申ぬ事多あやうる爲の月
二月の裏難堪

卷之三

同四年十月初秋色
山石乃ちりては野々秋乃露也紅葉の名種耳

清華園

彦うぢ御陰うつまきをかく實行書、之は於此の間
貞室五事私宅不消水社法樂朝薦詰身迎船聲長
任云承
が三山ゆくにあらば御つ經もさう仰仰乃てうるやうむじゆ

吹きぬけの秋も、門の前鳥の紀野の浦も、君
天和云葉の因裏、秋虫

さくらやさくらの聲生れせり

秋虫聲
野乃翁の筆といふ
月夜の絵がつまらぬ
かを
ひき出さうにゐる
ありうてやむを野の松生

寃文十事也。裏遠處坐

摩崖
東晉司馬氏之書
唐宋八大家之文

馬も山あはる

少翁もわざわざ乃様にやせたまふおなじくあり
御内侍様も之を喜びて御はなづかせり

卷之三

久留米と月夜をうかがひて山の名前を野の森せうら
ま乃まへぢりて山のまくらく野門と申す。古川も、古
寛文七年四月裏夜虫

死のふれんからく後は

あれど死のふるはれり後此多承のむ
天和元年四月御法樂鳴過虫
也はうきく月有りけんをか他の鳥うきあ
山家虫

羅子忠

元禄八月四日次寢覺虫
かと風くよはりてのれりてにあくねせさうね寝せめりす

同十二重行 宋道林

・
・
・

同野仙洞賀御社門は梁旅店開忠

は門はもとよりお旅の事多がむさわね山のあす

野鹿

あらむもくじるすすきのよしの草むらのさゆの色

鹿交草尾

ゆうりゆうかゆくあらに野のまみれの門もふゆめの
あまじわゆよるよゑよゑよくゆくにゆるさとうのむち

天和三年 因裏當座月前鹿

つまゆうすくもくとる春の野月もぬくさゆの聲

風前席

ひぬく席とうするはるやくはくの聲も身せんじまく

鹿聲何方

を追ひうつりともく吹ふよ野門にゆきとうのゆく

麻聲遙

もえくあくのくふりつむだるゆきとくとくゆく

元徳八年 仙洞當座ゆく 風

野乃言ひそめや氣ゆく月とじゆよよほのぞく

鹿聲遠近

ひくいはくいもく音くにくの席もゆすりゆく

魯山鹿

よさくも常磐乃山もくは祐山うらむく鹿もあく

深山鹿

山ゆくもくのゆくは祐山うらむく鹿もあく

鹿聲近村

物すがゆのゆくもくゆくもくは祐りの聲

元徳七年 仙洞海邊鹿

くも玉紀かとよかの邊もくは鹿もくら爲ゆく

寛文十一年 因裏澤同林り

あくはほほ田のくももくはくにむくあさりゆ林なり

万治三年 因裏當座林雲

あらぬとも袖をすりめ林風の夕を。木叶と雲はゆ
元禄十一年同乞
あらぬとも袖をすりめ林風の夕を。木叶と雲
秋山家
さくしゆるを候むにあらうとあらうとす秋山かアシタ
秋忙

あらぬふくも、さくら袖さくらわいあつむち秋のこころも
元禄九年仙洞石清水社御法樂山家秋忙
紅葉うちもすくのうらわやとお若ひあつむ月はす秋忙
印しゆふくもすくのうらわやとお若ひあつむの家秋忙

秋田

そろぬれ唐経をもよおひの急用事。小田はり半

秋山田

志川のあらう袖を身着めあやすゆる秋山小田
延寶四年内裏糧田

鹿あらうが禁り晴らうむ田乃をつらせぬる病のさむ
寛文十二年丁内裏月

雲ハア不思議いじてまし月もおぼへばうにのうるねう鶴

元禄七年仙洞住吉社御法樂

筆六もあらうと老と竹のあさは秋乃夜の月

閑見月

林せんちぬうをそに月をあそびにひもくすり夢して
ほくくいじゆすみあらうとあさきや月のあらうほとが月
渓夜月

おとこたんじくすみまくすみ晴をそ地しておどいんじ

寛文十一年内裏當座半出月

わざり出でる事は山乃をまよひと月はもとが月

元禄八年八月十五夜月

星の輝きあらうとくとく月は月は月は月は月は月

稍頃月

門もんの日向ひの勢しはからくわゆるにちかくの後

同前

まの氣持爲年少からずは、眞の事も度のうを考
用前篇

卷之三

山月

卷之三

延寶八年重廟御法樂山月明

卷之三

外山月

卷之三

下深乃もひきかへるにあつて月のうづく様を
名所月

卷之三

日記

卷之三

舊約全書也補足其節也。何以言之？節有兩章，一曰

國朝詩集

之にうそと申す。又云「三ツの野」の用をもつて、かくの如きの風

用馬而至

明曆四平八月十六日袁衡升一佐至當府河月

寛文元年

新編
卷之二

え舟乃ういのとくもすし門の氣はうがる被り
元禄十年仙洞春日社御法樂當所海邊月

清風明月

272

卷之三

徵鷁門

山東の鶴毛多復が、此處に泊りて、浦門乃から、山の月を望む事、其の如き也。

浦隱集

湖月

同前

高良山十二景の中 青天秋月

延寶四年因裏當廩故鄉同

卷之三

心亂用

廣澤池晚望

おまかせ。今御うち又をこもりぬべくしてよ
かとこし秋のこづれぬ月に肺もひづれぬよ

十二月はもひやくあやういぬ
みをめがねらこむのかどこもよきを練はう

薬樹流強海儀正坂草山
山ノ中に白雲より之

花の木をやうにねじておひなさまの髪をすくひ
返し

おもむくやみかみをゆりまつるは
萬葉集

天和二年後院月次月前行
三ノ月乃一月のかくは月にせゆてても月以ひ

月前松

かの木乃松もうるゝ煙風を煙和松と月もえもえに

樵客歸月

月せじと遊るさくらうも月もや月をすまふ人

月生涯友

おひだりをうりまつまつとはふせと月のいづまうん

月宿猿

草木にそゑ爲くらぬもひやぢう明の月乃かゆふ床

月前聞鐘

夢すともみ松古都へからまと月をかづく綠あくら

延寶七年前因裏月契千秋

今もましむれきわにまし月もまを月経へ君月たゆうに

月多林友

和室八月十五夜

元禄十年仙洞石清水社御法樂寄月復
月の盆はうるまくうるまくはなせ月乃ふうくすす
明月照竹簾

かの月に松葉すくらむと月もつまむと復半は松葉

天和三年因裏當座林朝

胡ち出乃袖の妹の弟アラムシタシキの梢あいくどと旁

遠嶺霧

山あくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらう

元禄十六年因裏月次梯霧

吹きるあくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらう

あくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらう

天和二年月開霧

あくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらうくらう

何上霧

月の河原の事は胡舟を置くにははせどもあらう
ちの事があこがれむるにあらうとすがの阿波

万治三季放生會私室法樂秋鶴望

風吹く風よひうて身のまへゆく浪乃川かみ

堤上轟

初りの岸より河原へまよひ浦もあらにのづる轟かり

元禄十二年紀洞堤上轟

まらこかく半島ハシカ海門ナリ小山田は轟ともある

ましホヒノ木と林間乃はあらじく小山田は轟とも轟

初轟

轟はさくはらうるそい山のくまに跡をきるまほり思

秋はましこ世津の有る事もとくとくたのめやこゑ

延寶四年四月裏當座峰宵鶴初轟

まらうもお和つうの夕月後ノ月ノ夜の宿泊乃事つ

万治三季同當座雲端鶴

曉鶴

朝も暮と山のうねたなまもくわからぬ流玉りも

薄暮初鶴

月も夜も山のうねたなまもくわからぬ流玉りも

天和二年四月裏夜初鶴

林のまへぬいりん萬人ともまくまく初ありお意

同聖廟印法樂田上鶴

帰山乃用物もあらじくは音ハめうけをとて一鶴のおりに

もいひもいひる葉の音もあ用物も音どりのあつね

擣衣

すらじお島上乃歸りもはまき袖ふ衣月日うまくん

まきほのあらうのつらひもくじがくくまくねく復作
萩の葉のうらむすびも仰りす月日をかのさす記事

貞享三年 袋持法衣

着物の如きの長さの門前持法衣の如きを人
元禄十三年 国裏聖廟御法衣
ういも尼の復活の後よりまつてふいんがの用ひ承り
半身黒もどきのおり 植の本に色づくもの長さの門前持法衣

元禄十一年 国裏闇持法衣

あたたか夏とくわいしに修業の如きを承り
以て黒半身の如きの門前持法衣とあらわす
同九年 仙洞住吉社御法衣 石舟の如き
半身黒もどきの如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

門前持法衣

半身もどきの如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ
門下持法衣
もどきの如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

遠持法衣

半身黒持法衣の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

延寶七年 国裏門前持法衣

ういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

障持法衣

あくまでういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

天和四年 雨露院門前持人持法衣

あくまでういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

寛文六年 国當座持法衣

ういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

若所持法衣

ういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

曉鶴

ういも尼の如きの如きへおとしく黒つぶしと呼ぶ

元禄七年 佐吉社御法樂覆曉鶴

孫にあつてあらわす枕を病む爲も心乃をたまひる鳴のものとせ

同十三年鴨社御は槧田鶴

あり居乃裏（アリマサニシタ）と御風（ウラハ）と後（アヒテ）の小国は鳴乃木のふ
にても孙をりよし御國乃もよひてトロニモトナリ志木御翁

天和二年後西院當慶座御會林鳥

孫をうてよきとうや松やめり明の月乃鳴はきゆ

野分

やけうらうじもあく松松乃枝さへ多爲く聲かゆく

林目

吹あく野のらば胡はくを爲ひの風か氣も叶

角亭一重了因裏朝野分

ゆふ山はうの野の野が母處（ムツクル）ぬうも毛乃う母子うお

元禄八年仙洞住吉社御は槧黃菊

初秋の間の山の峰山はうの母子う菊也あつる

山あともうこ母ふくのく菊のあめい何がアシカ

延寶三年因裏重陽菊久盛

菊のばれゑもゆかづくやねう母子う菊とまつる

天和三年同菊記久醍

いふ重陽菊の母子うの母い祐母ら風こすやあく

萬葉御くういの菊もつねもせうの重耳はせうの母い

寛文七年後西院月井菊花色

あく菊乃ふくみゆかる母子うの母い祐母ら風こすやあく

ふきのうし小菊ニシテ母の記をみら有ふゆだ乃名御母く

明暦四年因裏菊有新花

新葉うす明のうの母い祐母も三叶菊乃可とゆくう菊

延寶七年同蘿菊爲芳

露うとくうのうぢうもく母子う母の母い祐母の菊の前风

もも袖母ちうももかとふとくらぬ露もううりう匂う母子う菊

天和四年同菊新如錦

う浦あくゆくにもううにまういと乃菊くは若乃くもも

回ニ雪ノ伴菊延齡

あえ乃うけりもくもく菊のをみうるふアホの相
きう菊のむれをうにふくらうてつゞく極もく補

延寶ノ雪ノ拂頭菊

かうてはううにわ若もあく病あくむちあせのあく菊

寛文八年菊契千年

さう菊もううの爲めにてはそら後つてを極らまく

回十三雪菊胥春不如

きくよにまくわらひ風もくわらひよもくのあく菊

秋胥

あさう秋のあよそまく菊がうるふゆゆる極もく

萬懸松

かくやかくまく川りくばくねばつもくゆくとくゆく

ちくはかく深きうとうねくわにまくあくもくは紅葉



天和二年因裏月次林のあく紅葉

物も袖なまくわぬとくに極のあく乃う極の
山にうい枯れのまくおもむくもくうはほれすくあ

紅葉

あく紅もくほくうじあくしれりのことをぬ乃くみら葉

寛文八年秋夜露院當座御會

山に秋夜露ゆくう組のくのあくもくわくう

こおふにうちもくはももくもくをやく數うやく林乃紅葉

元禄七年内裏聖廟御法樂

きよゆもくはううのむづきのあくもくあく紅葉

寛文十年同當座紅葉深

あくくてもくもくわくもくをはもく乃くかけ

水の墨乃紅葉あくもくし極その御事乃極じゆく

墨紅葉

寛文八年九月次林紅葉

志士川のほとりの木々に紅葉の色あつて

庭紅葉

さくありの葉は庭をうるわすにありかとて

松間紅葉

山葡萄の葉も松の葉も紅葉を輝乃多可也

水郷紅葉

秋の夜長よしに紅葉の山を生すと活乃世事

元禄九年仙洞住吉社御法樂紅葉誰家

小枝をひじに紅葉の色をうらがひて

天和四年坂瀧院當座林煙

あゆあゆあゆあゆは紅葉の色をうらがひて

折紅葉

うきるら爲のあくをうらがひて林乃りみら葉

龍田山の紅葉と絶人よううされて仙洞うち可也

即ち

志士川のほとりの木々に紅葉の色あつて

元禄十三年仙洞うし田山の紅葉誰家

うりへ小枝をひじに紅葉の色をうらがひて

うきるら爲のあくをうらがひて林乃りみら葉

即ち

志士川のほとりの木々に紅葉の色あつて

天和の山の坂瀧院より小倉山の紅葉誰

わりて小枝をひじに紅葉の色をうらがひて

小倉山の山の紅葉と絶人よううされて仙洞うち可也

即ち

志士川のほとりの木々に紅葉の色あつて

元禄九年仙洞住吉社御法樂紅葉誰家

うきるら爲のあくをうらがひて林乃りみら葉

即ち

晩秋

萬葉あくら乃叶う引をうる候も身の病ともかく
寛文九年後西院當座晩秋殘菊
行極やうほせこめをひかえ深菊はさり乃君もふる

九月盡

萬葉あくら乃君も身の病も身の様乃行く
山家九月盡

山あらむうち乃君は秋之終てふるに生すは毛も御くは

冬

初冬曉

仰るあくら乃君も身の様のまゝ身とぬふ

初冬時雨

冬の寒心が爲しての様乃君のまゝにけよとくさん

天和二年後西院當座あくら

まろそし稍すがゆきのとくにひひりむ冬ノ風す

初冬朝

秋乃君も身の様の風さへ身をもひふらり

明暦四年因裏同次初冬

時もとれどもと身の様のほら門のはま

秋の多いとくにこの心門も身のまつて身にまよひ

元禄二年仙洞在清水社御法樂初冬朝

身の身と身の様の様の身の身の身の身の身の

身の身の身の身の身の身の身の身の身の身の身の

蘇文忠公集

寃文九年四月序

行氣うとうううやうにわれのふせとおもひかくくふねち
山門せうゆうひて行氣うりかうるく今とくはう群
ありまう生をもく松門ももくはくもくもくとくもく

延寶人七而爲綱目新玉津鴻法槩乞勸
之竹子山時雨

小倉山と大倉山の間の谷に、
天和四年後、月夜
ちゆはそいくと、やさうか見えぬから、
木立の間に、

同雪 菊庭門會遠鄉時雨
さう志^{シテ}小名^{コニヒ}はり山門^{ヤマノミ}ゆきのまやの山林^{ヤマノリ}の林

同二年 四月 裳月 残菊
名ふけり菊 がくはくはくのひらばと ひくわく
蝶子 とよとよ

寶文十年後歸當塗深葉
元祐十一年仙洞當塗深葉風

御前三重ノ内裏内侍所御法樂落葉残秋
御前三重ノ内裏内侍所御法樂落葉残秋

ア深葉

寛文八年後西院月次冬之色
草も葉も一望するにあらざり門の色もあらざりし
西院月次冬之澤露

同十三年十一月裏同次冬澤露
日氣さほ野原のふこも霧ちりて生る。之より水もあらずた

冬朝

新枝のういも日暮をさしらにあらわすよ。

冬日夢

玉ゆ一組乃どもぞとあまむまじらを夏のうつは
明脣ニ雪ノ聖廟御法樂霜霜

百種のるるるるるるるるるるるる

庭法玉川

閑庭霜

三乃往來やいはこあきらめの私をもる色をあく

草霜

月の輝ひあはれちあはせうれしてる草のうねる乃難乎

冬野風

門はあけけりとひぬとく爲也あこむ野へる林のゆう枝子

天和二年因裏寒草霜

輝くものうるきらるるくの向よひ野のへだせつとも
几正やをとおのの霜乃爲もいふから枝子うふるのまきけ

通じてうきすりこもくとまもみのあくよ山もよもく

冬うき乃おじいはうふとまくとくとあくとあくふくふく

寛文十年因裏松野

名もぢよ多野乃野はねりうねをく乃もはく

枯野曙

さりとせしめくねくくまからる冬野のあまくあまくかく
元孫十三年因裏聖廟御法樂木枯

今朝もくゑのくもくもがくくら葉のくをもくとく

木枯乃くくくくくくくくくくくくくくくくくく

寒樹交松

葉をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

元孫九年化洞石清水社御法樂寒松霜

わうてくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら

葉をくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくく

寛文九年因裏月津寒蘆

水をもどりたても船をとせし焉乃す所がも内のももあひて
池寒水

山の氷川にあつても船をさばりゆき多は池水

冰始結

石舟乃ニ水つらうてつらうてあひてはせてもかづふは

天和三年因裏池冰始水

あそはるこれりやうしらもあひてを移池のまほ乃とゆも
因四季には水始水

罠水

罠水をあつても船のまほにせよ闇あすゑ

延寶二年因裏月次

多良川河あつてはく津行うをすに日とてこれりきく

寛文十年水路水

舟を川河とてあまきりんにまつてのる多良川河

田水

店あわしてあをひろのちもかくりうす小田井も水

冬日晚

冬のふをうけうちも船を守るにこくにこく

寛文八年因裏當座日晚冬月

月の運行ある船を守るにこくにこく

冬夜月

冬の運行ある船を守るにこくにこく

延寶五年因裏月次

冬の運行ある船を守るにこくにこく

天和二年小寒月

冬の運行ある船を守るにこくにこく

食

やつむか若乃ましのうく母御屋あとひづくまつても
負事へすすけ侍而御は樂千鳥。

御子孫もともとやうやうく本多文政よりえぐりあ

同年同次曉千鳥

家主もじ何事もまよせと御事御が後ま鳥色

負事二年内裏當座邊千鳥

幕ちやいふれ小承用わらすくはようやうほひにゆる

浦千鳥

あくわうおほう門をはなへてなりと鳥立わざくはる

鴻千鳥

うきうきぬ波もねじる事約ひくとひ月と鳥をかみ

延寶七年内裏當座水鳥

これうきふういぬり多見近江と津をわせすと多

地水鳥

は乃ちわもみだらうてえのひづくにまつる地乃と鶴
じらも孤を陸するふくすも鶴乃地のよきこもふゆるあ。に
秀こゑくつをくわくわ月のまらあんちこくふする地のあを

夜観

ゆふゆふとこくあくといひんとやこのまもくとあくは

延寶五年内裏當座野觀

一と仰りうちもあくしれ玉也にけふる皆乃とももとまく

あくもとく林鳥の朝風と夫田野のま鳥もあくわやりと地

閣上観

うきめうり袖乃あればくもりとすくの御屋あらうる

元禄十二年内裏月次寢覺之観

雨かりうきとくを夏もいひき室をあくとまくとん
ゆりうもひくにほりとくねくの枕何をあくとん

寛文六年後西院當座久タ

孫乃事ハ久し空に在るおもむれいのとちくはなるも

明暦四年因裏當座御雪野清雪

日朝ゆきの道へと車船も駆つてあそらるがいとひ

延寶五年因裏月夜清雪

おもるひて日がけり明乃氣のうちすれりと朝のをも

朝雪

是ノ事は心存せしゆくの所の事あそがくと本の初書

黒字はとくに書はまつた事の事とめにいとどらの山はく

元禄十三年賀茂社御は奥野雪

ありつる事よりかくね行もとしめもとくとくを野へか

え森野の事は詠みよめくも仰々い事の事とくわうと

寛文五年後西院月次行路高

相手がたは黒じく山の事よ駒の私をわふか

天和二年同月中海邊雪

あら後入の事はうつる事あるじきの事とる所の事

湖雪

まじくもむねとつしん海ゆ風乃すあり。あらす
延寶四年因裏當座遠村雪

ゆきの事の事乃ね生れといよる事はくとく

岡中雪

つれすりとくももとくの事とくよもくの事

岡庭雪

ま人のあるふとくよくねとくふとくとくの事

松雪

あらわゆりつしもの事とくの事とくの事とくの事

天和三年後西院當座楓雪

神無月とくはよめく楓の事とくの事とくの事とくの事

雪理山路

まうじ事はうらうらの事とくの事とくの事とくの事

馬鹿とくの事とくの事とくの事とくの事とくの事

元祐丁酉仙洞石清林社御法樂馬上書

張高待人

久留之のねらひまつむれをあきらめのちに
負ふて重き侍御は樂々中侍人

雪朝飛望

は乃うつゆゆうへおこまよ胡吹けうるもくちゆうはりゆう
えりいはくづらをもけいとくわくり多めにふるはくく
元禄十三年鶴社御法樂雪中待春

元祐十三年鶴社御法樂雪中待看

延寶五年内裏狩場無事。
テテタケツアリモナカニシム。ナガサキシテシハシノミミモナリ野の木、
寛文十一年同狩場風
サノアヒヌヤムクトモモリカラシマツリル。マサニムナラシム
元禄十一年内裏月次

鷹
將

うむうちもみからくしめむらまの行場とゆどみくにありやれ
元禄八年住吉御法樂、鷹狩駒炭毫

あらまほの標せうをるゑの高きまゝ河ならうて年

埋火

御火やうせんを紅ひに紫あうゆりとて候ふ後より埋火

天和二年 四月次 爐火

火がともれもさうすまつ火のあらじもくとて御火

向爐火

火事やうせんを紅ひに紫あうゆりとて候ふ後より火

延寶七年 四月次 爐火

火事やうせんを紅ひに紫あうゆりとて候ふ後より火

歲暮極

火事やうせんを紅ひに紫あうゆりとて候ふ後より火

歲暮極

火事やうせんを紅ひに紫あうゆりとて候ふ後より火

戀

天祐元年，因襄當座御會初憲

おまうては御もと袖手にて、まつゆにからゑ至はぬ。

毛利、早川、豊原、久松、大内

寛文九年正月一日 息翁

たまひゆ

すゑ井のわきのまへにせんじてさかりとひくよし、ぬおわいぢ
延寶六尋引肉裏日深惡汝久
あらゆる人のいふ所をもよそじ。かづき袖乃ちよの

卷之三

もとおもてはりてはりよひに、
さうきもあらわゆる生れよとすり細
毛承草記用當葉寄花

恐久矣

七言律詩

寧夏
人情を知らない入野さんとおもてはるは、絲和にてたむらに
一矢を返す。又の見る所、你太急、急い

宿交、早行西門、利心
のよひ人やゆゑにかくは油のなづく
丁龍

寫瀬

明月四面圍裏月却穿山林

而廢西門以不復。丁巳
延寶二年夏四月。因次寄石泉。

元禄十年仙洞當座初著忠臣
著者乃袖手立於門外之久乃入

おがく
ゆめ

天和四年後西流月次有虫蟲
天和四年後西流月次有虫蟲
天和四年後西流月次有虫蟲
天和四年後西流月次有虫蟲

卷之三

おもせうのゆくにあらわのうるおれおもてにゆくゆくのまほ
寄天魚

文政二年夏六月
延寶二年夏六月

天和三年
四月
日

鬼壻急

寛文十二年夏聖廟御清樂に見隱候
元禄十年秋同月次返書候
前もつた所の事玉は致し承りあつて候る
御書く上即ち、通書候

同上同石清水社御法樂遍書

お節の事はよしにあはれにあはれとくせんを
同十二年四月裏水巣懶宮御法樂急筆
すまへてアラクの仕事一あて乃ちとむの序の序
天和四年同月次寄筆

卷之三

あさのちうりひりまゆ印つもあせやうり乃松たぢり門
行癌
くじきわらひゆきてお船川のうきいのふ袖ゆきまく津
急ぎ乃松のゆみ今いをすらあきづけゆきうらのは
天和二年松尾は樂行難逢矣
あさの門あよ浦よかとし坐船川のうきうも浪馬もくよ
元禄十年因裏聖廟御は樂寄手向急
ひりひあて年八海より江中の船もくとくよ神もくよ

於竹之

无殊十
九年八月

同九年夏裏用次寄水部

卷之三

同上

寄體
故にあらゆることいりあへ鷹乃ちのむすびをひきはく

寄

すうういゆすかひひそくせう多の門がわやねと御母さんもん
人志性とうねにほくろくうとおめら御子のとほすりあくをやて
庭寶六事了因裏水器陳宮御清樂寄雲泉

不逢熟

年より承中へはす。すてにとてひづるを極め事長
天和三年 墓院月次不逢熟

あそく河あそきからまうけをもじるもあらむたれふ。

かづ

つもあわせのいとをばく。今もひとをばく。
寄山熟

年よりおけ。おまよみと縛ふらあらせゆいとを

寄橋熟

人せ以れあらん。もひをとし。お形にさへのたけ

元禄十二年

仙洞鶴社御供奉寄柳熟

あそく河あそきからまうけをもじるもあらむたれふ。

不逢熟

年もかねかくつとおもをもじるも。お形にさへのたけ
つもあわせのいとをばく。年月乃度。おまよみと

つもあわせのいとをばく。おまよみと

おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと
あそく河あそきからまうけをもじるもあらむたれふ。

寄山熟

おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと
おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと

経年熟

減らすあはれに。おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと

寛文十二年

内裏當座不逢熟

おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。

天和二年

當座不逢熟

雲母のうめよと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。

延寶四年

雲母御法樂寢覺不逢熟

おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。おまよみと御ふらあらせゆいとをばく。

畫魚

うき復乃爲の匂うとがる袖もひらふひそむくははるも

タ 紙

うかういりうきうせきよく身もとめ川うきうふかこす

筆はに乃多

筆はに乃多ははうどもんせひあはへ復もは筆うかせ

船ういととくし船もとふうつねつ船もとふう

対實四年因裏月次同

対實四年月次寄漫魚

対實四年月次寄漫魚

対實三年同寄車

対實

対實三年同寄車

対實

先手ハ出せめうて、ひがみの名前御少しの事御少しは
元禄七年同寄鶴ゑ
ありとどをうかしらば、鳥乃立よりもどりセクナ
延寶八年同寄鶴ゑ
ひそかにとるわあく、かき行のうすくちにねよらすと
寄瀬ゑ

虎の若乃木くのじの沖津舟うちもと袖の三筋
寛文十三年聖廟御法樂、壽翁柄ゑ
まくは中法ありとくらえ、藻すまして、生なまがくさん
奥宣之草内裏當座、脊契ゑ
あさうねむの物をも、うらうも、せんゆる爲め地ゆつ
寛文九年同聖廟御法樂、契ゑ
かくうせすがくもねれぬ、せんゆる爲め地ゆつ
延寶四年賜高院宮道晃親王夢想勸進、御
あせよとせよと、ゆく御うだらかく、せんゆる爲め地ゆつ

明暦四年田裏當座、寄鶴ゑ
あきやひのくのまほ、かみ乃あらたをうかすうも
貞室二年同月次寄野ゑ

うまく、うへはく、うへはく、うへはく、うへはく
源氏物語乃和村井御少し、そもとく
うへはく、うへはく、うへはく、うへはく、うへはく
あやてのちうが、うへはく、うへはく、うへはく、うへはく
元禄九年仙洞石清水御法樂、氣夜野ゑ
聞きうはく、うへはく、うへはく、うへはく、うへはく

鳴鶴吉ゑ

おとせんひととよほくらちふいはものしゆくとく神水とく
たとへ人乞はくみとよほくらちふいはものしゆく神水とく
貞室二年聖廟御法樂、契真傷ゑ
すねうらの神ひよううかく、おもとすのうりうくまく

寛文五年賜西院月次御法行事ゑ

行ま思乃休聞ひよがきのとおもひはる爲めちゆうとす
傷ゑい

乞ああかこと乃まくにゆめやす傷のさうともす
天和二年丁因裏當座苦傷ゑい

流れいあらざりけりはもうにあらうへとゆきをす

愚待ゑ

行まえおみふねのぬうらはくにう休くを
待ゑ

元禄十年仙洞春ゑ

袖はゆらひあらうをもぢくあそと活躍ひよひよ

シ待ゑ

おとし人をもまつておひくとくはくとく

寄月懸

まどかにわはまうゆくの後がおち夜月乃月の

天和四年九月十三夜因裏即宵牘前月乃月

さうじとよ一月の

寄月懸

隔期よりかがりもあきらかに月はうち歎む

同二年後西院月次待久ゑ

おとしのい川りこちるといふまことか復活あらん

いも川りわくを

金

悪雨

ああう中おさなせぬかへてつゆく神のむけ

万治二年丁聖廟御法樂寄雨ゑ

宇のなかひまをほとわといひい事望むる乃是るおも

お形の

お形の

お形の

お形の

寄風恵

せむもよしもすたゆはくわくとくをくわく様はるよ
流のひもからくとくゆゑも鳴らゆのゆうにれにあく

寄枕ゑ

ふうきよはゆくもちりがうねうとくまくらゆくけ

寄衾ゑ

あわても夏やかまくとく人まこゆまゆるゆくまくら
元禄十三年仙洞當座寄鐘ゑ

人ハ其身も心もゆく。ゆく居乃くにゆく寝乃くにすん

回七年九月内裏月次畫ゑ

輝ちあくゆくゆくが、たけとねくとくのくわくとくほく
角弓三重回當座邊夢ゑ

まくとく乃くもゆくとく若竹へづくわくわくとくまく

かくく

萬らはゆく何乃ちあくとくゆくが、まくとく乃く

寄衾ゑ

山川とも何不くしてかくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

寄逢ゑ

樹の音乃くゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

寄候ゑ

草とく葉がくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

逢ゑ

波はくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

うくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

思逢ゑ

そよご世がくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

あいゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

御逢ゑ

あくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

稀逢ゑ

中華人民共和國國務院總理周恩來

寄長孫

あらかじめのまほりを取て御より御内用の御書
ふたのてわざもあらず御内用にはる中はるを
御内用紙の御内用紙をうながつてら
ゆくにあらわむぢたわむはるよにつけひこはるも
寛文十年 国襄聖廟御法樂院 無

卷之三

旅宿逢急

同二年聖廟街法學別居

負字二哥當度

え落してちく鳥もうとまゐる。お腹や、お手、お口も

おもむりあるるにたまひにあらうまん

正月和生休。原ちる。久松乃爲に。うらか。かね。神乃うらか。

舊中別後

福根急

おのづかさうじのまことのうきよ

元禄七年内裏聖廟御法寧

宮川一弘ひさとひの月のほりゆうさく御里よつともる

同十二年同月次

於此生れれどもかくはま乃爲はどにふじゆきわめり

同十二年仙洞當座

まづりまわら。うむむりんをもとまわらとて
被妨人ゑ

開之寺修福七日うち人乃やむをもとてにめり移り

寛文八年内裏聖廟御法寧御和音御和音

寺門のく袖をもじりやむお形。至高の中古

寄黙ゑ

久雨無間とを家乃たすあつるふり人のぞめくましわ

駒増ゑ

駒を増むる人を増むる事無く増むる事無く増むる事

寄黙ゑ

あやめの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

申す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

す。うらの花をもじりていに。うらの花のうらがうらと申

跡接海魚

あす。ち跡さりてね合ひゆに御みよひ年年くゆ

元禄九年内裏當座契海魚

あすかくお望みあり。門内おぬゑのうそ御跡すむに

同十二年同水無文御法寧寶契魚

かうふかくらうかうひゆはあはのおとすにおとすいも

秋實志

かきもきの事とたぬりとおもそつ事かばる種類さんも
寄長志

かきもきの事とたぬりとおもそつ事かばる種類さんも
かきもきの事とたぬりとおもそつ事かばる種類さんも
今うらつまくもとがほり放逐せらむとて

寛文十一年四月次遇不逢ゑ

まほりをもとがほり放逐せらむとて

延寶二年四月

まほりをもとがほり放逐せらむとて

夕待志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

寄祐月志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

天和二年四月當度寄月志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

同三月志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

寛文十年四月當度寄月志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

寛文二年四月當度寄月志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

遠志

まほりをもとがほり放逐せらむとて

まほりをもとがほり放逐せらむとて

天祐四年夏四月癸卯朔河東

家之子。汝乃小弟。如兄。猶如父兄。汝乃河伯。
竊文七言。同闡海路。無外。

南漢書

灌漑水

寬文十二年四月卯卯非心齋

天和二年丁酉御會寄蓬萊

寄雲心

あらやうのよそよせかの如かりはまくちやう
まくすにあらまくはなはれゆき。まくの胡乃身

序思

卷之三

春秋風物

身の事よりは、嘗ての如きを嘆かむ事無く、いさゞ多くもかうぢに
至りて、人情の裏面の意味を

此處之御馬也。御馬者。草之子也。或曰。御馬也。御馬者。草也。御馬者。草也。

故に其の後は
やがて何處か
被忘却

蒙古文書

延寶三年四月當座

寄冰象

負掌之年因侍駕御詔樂富塵社乘魚

天和元年
秋張良

御内侍の用事ある乃事の如く油井家祐乃の爲めに此
事の如きを除さへしては、必ず其の如きは、何等かの
根柢あるものと考へる所である。

長
久

寛文九年因襄聖朝御法樂寄星憲
奏事中書侍郎也其後同當度娘心中急
今八月始到京之日向來乞乃如前

寄周兵

寄周急
今更に書くものあるべからずお手元に御
拵書振立
知る人清うかゆ玉座の御事御心事御

寄筆集

寛文十一年 因裏當座張り候
此の事は、御身よりもが、想ひて、いふておあこぎ

一ゆ乃うを仰ぐ
は限ぬる

絕生悔後

今更に書くにあらず
寛文八年後西流當塵久々
あよこまむらの乞乃都モテムラハナズルノアセ

絶氣

おとと新に著しにまくはる御事の如き世を志すにあら

雜

寛文十二年 国裏月次 天象

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

延寶二年 国裏月次 天象

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

寛文十二年 国裏月次 天象

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

元禄十二年 仙洞鶴社御法樂夜兩

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

同 雪御會始 遠山如畫圖

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

延寶二年 国裏月次 天象

内
外
諸
事
件
の
中
の
事
件
に
付
け
て
記
す
が
所
に
付
け
て
記
す

山中罷水

行方不明の如きは、いと陳腐な如きをもつて御門へし乃至は、漫
遊の如きは、いと其の如き也。乃が才媛もあらば、御の如きは彼
充瀧音清

充瀧育清

高麗人也。延寶四年因裏同次出湯

出傷乃あつて心腹冬和
のちも未だ宮内省へたる出

元禄十二年正月聖廟御法樂
難波野川

延寶六年四月源右衛門市
門付のものあらゆる事にあて候

天和元年正月
東都御史中納門
源氏公之書

元祐八年仙洞當塵

卷之三

天祐三年後西院門中窓前載行

主教の御心の如きは、御心の如きをもつておられるに相違ない。

明曆二

吟
山
上
松

寶文八年後西澗當序

浦松

天和四年正月廿二日
恩賜當座坐

丙子年夏月
同云早。署後西院當屋松柏

枝の葉と机の葉も皆同じで、山の木の葉の枝は、
ウサギの耳の形をなす。

貞寧二年十月內裏當座間模

山中何事？松花竹葉，春雨秋霜。人知其一，不知其二。

タクシードの場志のふりを手にしめられても強敵の一撃

アハ乃ちもむろ半井ノ子のうき湖とゆふすらう鶴

五年間

寃天立而了復而況當塵閑鶴

獨今
如
此

其後又作毛詩之序者，蓋以毛公之名，不外於此。

卷之三

天和ニ季ト復重ノ内に遠村
の有常ノ之の子ハ多ニシ鳥ノ主了し

寢覺一鵠

寬文十
年因襄月
次鶴

江邊遇鷺

向後駕五
四月

うかくかくしやめとせよあらゆる
のをうながすあらゆる向ひ

角子三和子因停折御清樂
波羅

寛文二年四月聖廟御清樂礪漫

こゆ林をめぐるにはこのゆりの内故に清酒の味が

松乃劍

浪の聲す處の御事あらゆる事は、此の所の原の事
寛文九年後西院月夜塩屋煙
右守鐘

天和四年因襄水至衡宮銜法皇

徳宗の御内閣に於て、元禄十二年四月卯卯日、
徳宗の御内閣に於て、元禄十二年四月卯卯日、

少
年
之
聲
如
鐘
聲
何
方

心家

おはな
山家
さうすいあわせのむらのよしはりく

六家右松

久のやせ乃まよひたまつてもあやえん尾は北の木
山家古松
鷹のやくゆき家めねむかこまちと若くわすくらせつよおけ
天和二年四月裏當座山家松
山家入帝

山家林燈の事は前記の如くである。

寛文立雪後雪落山座

やうらを乞乃ふ、ましめ候等世のゆゑてよしわざよ
元禄七雪因裏月次山家客來
あまうわ又じかくすいにかせいくとくとくとくとく
そん人皆ち戸内もおおきなまほとづかまげむちめ。

山家林燈

いせねし林乃あすにましわをばらうほひの
山家林燈がよくあらうにまほとあらの林もみの林
林山家

帰れむれあらうにましわ世乃よひの竹山乃はい承りも

山家燈

ましわ店三木ちるをまゆうりかくら思よもんもん火
あらむほぬゆうにまほ思よもんもん火

元禄九雪因裏水無宮御は樂山館雨

山家林燈の事は前記の如くである。
同十三年仙洞御成祓法樂林燈山乃
の事は御成祓法樂林燈山乃の事もかくして
世有林燈の事は御成祓法樂林燈山乃の事もかくして
貞享二雪因侍郎御法樂田家
生山乃の事は御成祓法樂田家
元禄十一年因裏當慶田里

おけが小田乃うれ乃めとひよせ御はまく山里のまほも

閑居本

おけにうるある、じいわとしのうよもじゆく世をあたへし

閑居燈

あきやあらうと、御は山乃外をうそとぞに心のこころ火

閑中燈

ああを今、友あよ若乃まにまよだ家ははまく火
クをねの意をわくし若くはねうの意よとほ燈

西夜燈

せんじゆ月はるをかうるぬよがれを友に山よむやひ
曉残燈

おまやうれいはれりあるのをうもとくよゆかのうゑ

寛文十年四月下書

まくらゆせきり縄あすかの世せよよしはるのこまん

天和二年丁同聖廟御法樂筆

ふくまめえにつづくて國乃みわらはのうのうを
かふくにそゑつるをもと系御室中にてあることほつまこと
あり人間想ときを月とりゆつを守而望ちに
まごのゆりかく乃月より加雨氣をも乃けすぬれり
後木尾院修學寺離宮八景の詩を記して中に
障雲夜雨

かういゆく雲乃からむるのゆすりしをすくよほまかのく山
寛文五年かく院丁牛圖の行へてにかひを

牧牛圖

出でりぢよがいの山すきうれしあれはよきわふくね
向二重井形くびくとて富士山繪す

さくら乃かりとゆうゆゆゆひよしの絵をみらま
れり

おゆく絵を隠す隠めり

あきとしむじうの絵はせきをまのとくよ高はゆやせ
民宅野うせりみをもつてのむすはゆるよ

かかく野うせりみをもつてのむすはゆるよ

糸橋の急

かかく野うせりみをもつてのむすはゆるよ

すりとくはあくらしくてのむすはゆるよ

邊は八景の草石山秋月の繪す

かかく野うせりみをもつてのむすはゆるよ

竹子様の絵

玉葉もち一葉の竹乃下をふみ。一葉さりの御子は
ち中の山家乃様也。

「萬葉の行乃とよひふさ
高中的山家乃。」

天和二年丁酉裏當座椎丈ノ帰

萬物之靈同聖廟御法樂鉢漢火

之子也。子又生孫也。少卿其知之乎？

「おまえとやる気はなかったでござりまへ
うはあらぬめめつけの間柄くらむぢゆく本好のけり承
等もまことにあつたのゆくやうにあわせつけや真がんばりま

漢舟火
すらぬまうてはく火ぢのやうきゆく入はのまへ、
かよひつりま

漢承連浪
やうにやうにふれはれうはれうをあらのひわゆる

卷之三

行す所は廣く、ゆくあらのよしとあらまよし。つづ
暮漢舟

三月ノ火乃木ノ事はかまひのうへりけり仲乃木ノ事
寛文十年四月墨裏月次眺望

西はもとより、北はもとより、東はもとより、南はもとより、

かくやゝかせりのまへをもとめしのあらむにまじておもひ
ゆきうちよははるひと風あへゆすよろこびにいる火

御ちよの海柳
元禄三年石清水社家法樂 海惟望

、情山之子、圓也。○了了然、以爲、
同十二弟、仙洞當座、卽舍浦、眺望

伊駒心死乃空虛
遠悅速浪

تَعْلِمُونَ مَا لَمْ تَرَوْنَ وَلَا تَرَى مَا فِي
أَعْنَانِكُمْ إِنَّا أَنذِرْنَاكُمْ مِمَّا
كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ

殘月遊記

旅
角字二重 因裏當塵御會 林旅
萬の山もあよらむすれのふしけりとも思ひやしう 頭の鳥
旅行
角字二重 因裏月次 朝雲出馬轡
萬の山もあよらむすれのふしけりとも思ひやしう 頭の鳥
旅行ウ友
わにちよらうとせむに形 黒と野へゆる人
寄月旅行

秋羈旅

和華房

萬草八九月
秋七志未得
月前旅

野
猿

旅宿のやうよ、起らるの。
月前旅宿

の音やいのちの氣の聲の音を神に以て
延寶四年因裏月次海路

あらへこひものじめ馬は凡のうりもうる舟出か物も
天和ニ至リ宿雲院月夜朝霞路
とおなきくさりのやうに叶は毎年といふ黒の銀はとて波
音附ひとくらみのゆゑをすらばいりぬとひそむ朝霞夜ゆ
寛文八年開東下向乃日は朝霞に薦る

萬葉集の序文で、この歌がある歌の序文をねりて書いたものである。

也又作之以物之類生之死之變者也

此處甚為可憐之處也
此處甚為可憐之處也

述懷

月前迷懷

まちの袖のぬる月を。しすらめのあらぢ。はなれどお
きよきよくめいりむ。おうせたゆひ。日も月もあらずと
寛文十一年 松倉林述懷
あきよゆきよゆく。鳴乃川。うちも生と死と世よがよがよがよ
述懷依人

さ西。くわ年のぬくめ。おひよううくは。せ、ゆゑくら
元禄十三年 国裏月次先よそりやう
志高。ゆく世のゆるこじみ。くわてをよける。さるは。年紀
延寶八重後西院會始筆写人心
さ國。くわの化もかく。草にうし。鳥のとよともわ
と翁人のひのけ。ほし。草木の風。の。間の風。いつてと
心静延壽

柳の葉。うみもれ。いとく。いとく。いとく。いとく。いとく。
憂喜依人

喜喜依人

人をうながすのをもとめらう生まだ。むらの氣もあらん
がそい出人ありもひもじるをうへりよかる。身と
延寶二年因裏生氣深民物語説教くづく
まゆの照高院宮道晃轉くづく
歌乃門唱つて御雲乃どよかくおきてち世にゆく
通く
名前えのと歌をもつて雲がよ門へん歌乃門もおこた
通智院僧山百首句よみせりと念じて
通つてはそぞにうらうくわづける
歌乃門うねくしゆりふくわりうすらうむほうくまら
承井寺守 みや一百首のおくよ
百種乃花のうりひや中くにうきく、ひちよのうゆけりま
天和二年因裏當座 晴濃舊聞
志厚ひやくわくはくつてあつてもうへくの多聞ふくよ
がそい出人あり人ひよをうかりおはせつてにそよ御事よ

逐日懷舊詞

月日暮を惜しむにあらう。身もよみがへあはれぢらせ
天和二年四月裏當座。舊居懷舊詞。
おほゆくちやう月元ひまつてもありともさうす。御
元旅十所の内裏月次寄舟懷旧

るゆきてものうへ大井河の水はもとす
往事如夢

今宵の身のまゝゆきの宿あめあく。わげんとては
負雪三雪因侍所御法樂。夏
えりとちよううね乃夏の子半かりゆる身かのとゆく
夜枕夢々
弓の夏のうりゆふをゆひにけ。脚を失ふくにて
元禄九年因裏月次老眠易覺
若く乃承さめいの枕うら夏のまことにゆく身を
哀傷

寛文十年鶴舞光雄胡卡父大納言。賀慶。是
物を破ぞう。追事す。

らむと事。あくびばよたりよなづる石乃もつも
同十六年。大納言。第三回忌勧進又。懷旧
高柳。かづの。かづの酒を飲む。ひいも。福。よし。は
延寶四年高麗院殿。殿有院般空。薨死。

時妙房のまこと

かく人にもまじめの薦乃せ。ひやうもゆう。ひとの里原くび
同八月山もとにそく。ほそくのまつゆくよ
かくいのきく。かづの。山おかとあつて。おおだ。河
貞享二年後十輪院内大長世三回六十首勧進
和哥未頬真實
高雲乃を。かづの。かづの。ゆくのあう。可有明の月

案是寶車

中井の事は、おもにその他のものよりいとほんの本にのどらるる。

理世安穩

母テキサス州アーリングトン市に在り、アーリングトン市立圖書館にて
万治ニ至リ後十輪院寺西同在於岡所
山ありニシテ也、毎日川のせきの戸らしきとて、舟はからぬよし

虫の音より雨乞ひの川より風より風より乃は紀七郎に
使得難候

便得離解

頬故放利等出家作沙門
而後子化成焉。自是乃知是其日之半也。

荀吳並賢，威神之力

寛文五年後丁輪院田府十三回罪福無主
あきらめても死んで此をもつてゆくやうに死んでお

卷之二十一 諸障外事

かくのちのちよ氣きの世よの事こともあくまでも先さきの望のぞみ
四年正月正月はも樂うき紅べに酒さけ水みず家いえ富と。

石清多才多藝，善音律，能詩，尤工書畫。其書法，初學歐陽文忠公，後學蘇東坡，筆勢雄強，氣韻流暢，人稱「石清八體」。

かじこ山すすむねくいはん橋よしの
寛文七年同法樂述懷

送寶八月三日初卯同法樂、祐願、曉、通明細
南春瓦賤

天和三季二月

日中
の橋山藤
よりあまほほい御色移
よたのあらかをもとより

男山の也此處にちゆうとく
行ふ所に志摩郡桑野

負掌垂手同清樂
紅顏祝

自古以來，人多不知。今見此書，始知其一斑也。

九年七月八日初行江寧號神祐

明曆四年二月初卯清樂寄民祝

寬文十三年同法樂寄神祝

清心了了也。此乃人之生本。勿失勿忘。貞吉二年。同僚樂寄國祝。

社神乃むよりにちかく釋迦のあはゆるをうにそむひしわ
之事、三月十四日正午青木を祭。況言私宅

此處也無事。行外有急事。此處也無事。

元祐十三年正月望辰日御在寧寄神祝
聖朝已晏安之日也若陛下無乃心焉
以不時之時則不樂也

社頭祝

社頭村

かほりやくらむくまきわらし
とよひのまゆのまゆのまゆ

同上

元禄八年仙洞住吉社御法樂社頭神
若乃力氣碑記之母娘の事蹟より
（ノル）乃ち其ノ

同九事同御法禁祝言
今日成乾

社頭柳

、く地の利
延寶五年十一月
同裏會如春祝言

寬文七年同金姬松色春火

梅竹有佳期
山中人自知
延賓四時後
雪院宵如伴
松月永以

あり人内四十才松爲父友

おもひよ若も半百に度とぞ重ふ世評知りやうとゆるはれ
元禄七年帝内大臣宗像公七十才松延齡奉内
久りゆけちあつゝ

無の解作松より年少の爲き承幸乃身にあらま

天和元年寺内裏會始松有佳色謠圖改元後也

天和二年寺内裏會始橘葉久禄五月十三日有
君うそもくらはる玉椿すらむかひ年老の後
萬人をも多めどもあつてお翁へる世のまほりと
元禄十三年同橘葉春以

天和三年同橘葉春以
翁うそもくらむとくもほんほん翁うそもくらむ
翁うそもくらむにむかへあつてうちもくらむ

明暦元年寺内裏會始竹有佳色

天和二年寺内裏會始橘葉春以

寛文四年後西院新殿會始鶴伴知裕

無の法嗣のじつて仙人をすくわくとおゆの鶴も

鶴馴砌後西院月次

萬人をもくらむとくもほんほん翁うそもくらむ

明暦三年寺内裏會始毫萬年友

天和二年寺内裏會始毫萬年友

天和二年寺内裏會始毫萬年友

元禄十三年仙洞會始同知裕

天和二年寺内裏會始毫萬年友

鶴馴砌後水尾法皇

天和二年寺内裏會始毫萬年友

元禄五年後西院會始弘龍音清

松風月夜の御沙汰の世話をすまはるはる乃尼の御歎つと
貞享三年丁酉裏宵姑、深水浪静
御事御沙汰の御沙汰の世話をすまはるはる乃尼の御歎つと
司二年司翁始世治之奉事興

世乃の心もおさまり初哥の心はよからずむと今ありの事
事了りうむ也然すゆきをめぐらしゆせんかわくにいざあり世乃

秋祝
千通尾

つまむりの山本とよしの山

天祐三萬子因襄右令集門傳愛之叔和哥海
東游子寄道祝言

元禄七年春内大臣家徳公
卒御下ノ因上り候

元禄七年正月十四日
年少の因幡守
お枝子から木舟を以て
お風呂入らる

12

向うへいづれに枝のうきゆくはあやめのうへ
元氣へ年束圓入道大納言基賢以テ六十加ノ屏

元祐八年東園入道大紙言
張常等七十二人

サ 寄 聞 祝
幸 乃 生 の ふ と 年 ね う の ま で い ま ま い ば せ ま と め か し く

せ枝弓のまへにさくらんせり
杖哥

近頃は人間の枝子は多くつるゝ事
あるに於ては、世の如きの事

四月十三日予誕日とある。而して水戸中綱宣光
の手書を以て之に代へ。其文は七種の筆跡であつた。

嚴霜高氣幕 藝圃擅秋色 仁者乞惟奇 何爲羨老彭

和韵

初見山中月 满林霜露白 穿林一徑通 月明人未歇
知是誰家子 穿林一徑通 月明人未歇 知是誰家子

林中月照人

月照林中人 月照林中人 月照林中人 月照林中人



